保育現場と学問の交流の中で

――一九七八年・お茶の水女子大学児童学科現職研究会の学びの中から〈その三〉――

長山　篤子

今回は、H幼稚園の公開保育と、その保育を巡って議論された事柄について記してみたいと思います。

H幼稚園は、埼玉県にある幼稚園です。古い歴史のある市街地のはずれ、住宅地に位置しており近くの一般住宅と殆ど変りない木造作りの家屋です。園児は、百名。園庭の中央に大きな桐の木があり、その回りは子どもたちの作る水路と山で、でこぼことしています。園庭の陽当りの良いところに「うさぎ」が、飼育されていました。室内にはハムスターとザリガニが飼われています。子ど

もたちは、のびのびと見ている者が心地良さを感じるくらい、「汚れることも何も気にすることはない」と確信に満ちた表情で遊んでいました。

そんな遊びの中で見学者の注目を引いた一つの出来事が起こりました。年長の男児M君が、室内で飼育されているザリガニを二匹砂場につれて来ました。M君は、二匹のザリガニを砂の上に置き、山を作り、水路を作り、そこにザリガニを入れました。T君、K君、Y君もやって来て、山や水路作りを一緒に始めました。水路には木で橋をわたし、山にはトンネルを作りました。M君は、出来上がったトンネルの中にザリガニを通してみました。二匹のザリガニをトンネルの両側から入れてみます。トンネルの中で出会っているザリガニを見て、「ワッ」と歓声をあげていました。水路の中に入れて見たり、又山を登らせてみたりしていましたが、Y君がザリガニに砂をかけたのがきっかけになり、K、T君、M君もザリガニに砂をかけ始めました。砂の中からザリガニがはい出してくる様子を興味深そうに見て、それを繰り返し行いました。見ている見学者の表情も次第に堅くなり、私もドキドキしてきました。内心「早く保育者が来てくれないかなー」と誰も思っていたようです。ザリガニを埋め始める前に、一度保育者が様子を見に来ましたが、「どうしようか」と迷った表情をして、別のところに移動して行きました（後に話し合われたことですが、保育者は普通でしたら「ザリガニを飼育ケースに戻すようM君たちに言ったと思う」とのことでした。この日、見学者も興味深そうに見ているし、禁止が多くなることを懸念して、少し様子を見ることにしたそうです）。

繰り返し、ザリガニを砂に埋めているうちに一匹のザリガニのハサミが折れてしまいました。遂

に見学者の中から「かわいそう！」と声が出てきました。M君は、声の方を振り返り、戸惑った表情でザリガニを二匹手に持ちました。他の三人の男児もハッとした表情になりました。T君が「お家に返そう」と言い保育室に向いました。とれたザリガニのハサミは砂場に残っていました。M君たちは保育者と保育室で出会い、砂場に戻って来ました。ザリガニのハサミを拾い、水で洗って砂を落とし、ザリガニの飼育ケースに入れましたが再びザリガニの身体の一部には戻りませんでした。セロテープでも強力のりでもつけられません。保育者がM君たちと一緒に、泣きそうな顔で考え込んでいました。

この日、ホールでも、ハムスターを飼育箱から連れ出した女児達が、積木で家を作り、通路を作って、ハムスターを走らせていました。

＊

見学の翌週、見学者はそれぞれレポートを持寄って大学でゼミが行われました。

ゼミの討論では、ザリガニをめぐっての保育者の関わり方が焦点になりました。ハムスターも同じ対象になりました。

H幼稚園の保育者Sさんは、「生命あるものに対して私自身の心づかいがたりなかった保育の中で自分自身の考え方が子どもに伝わっていくのがよくわかった。動物を自分の仲間と思って遊ぶ子どもたちにどう対処して良いかいつも迷いがあった」旨が述べられました。見学者から、「子どもたちが、ザリガニやハムスターを、仲間と思うより、おもちゃとして扱っている。単なる物として

の扱いだった」と意見が述べられました。「保育者と子どもは、一人の人間として向き合っているのだから、命あるものに対する姿勢は、はっきり示す方がよい」との意見も述べられました。「このような扱いをするのだったら、動物は飼わない方がよい」と強い意見も述べられました。

このゼミは、改めて子どもと飼育物について考える機会となりました。どの幼稚園でも、沢山の小動物を飼育しています。大人も子どもも、それらの小動物から、不思議な生命の働きやかわいらしい表情やしぐさから、慰めが与えられたり感動が与えられたり、死を通して、再び帰ってこない小動物に接し、悲しさを味わい心を動かされて生活しています。そんな小動物が身近かにいることは、確かに人が育っていく上で必要である事には皆が同意しました。

しかし子どもたちと一緒に、そうした小動物に向き合う時、保育者は、どんな姿勢でいることが必要なのでしょうか。それぞれの幼稚園で充分に話し合い、「保育」を作っていかなければならないことがしみじみと語り合われました。命あるものに対する私たちの姿勢について多く学んだゼミでした。

こうした内容のゼミからは、見学者は統一した見解をもつ事は出来ません。又、大学の方からもよい資料の提供があったわけではありません。研究者も実践者も、この問題をずっと引きずっていたと思います。このゼミの後は、研究会では、「時間を巡って」「幼児教育に哲学を」「子どもの遊び」について、学び合い、直接小動物や飼育について研修会を持った記録は残っていません。大学の先生方も、この問題については、それぞれに考える事が必要であったと距離を置かれたのでは

ないかと想像しています。

＊

最近、私は『虫とけものと家族たち』（集英社）と言うジェラルド・ダレルの本を読みました。

この本はジェラルド・ダレルが出会う動物との生活が実に楽しく愉快に描かれています。最後の解説に「ダレルが一匹一匹の動物と、すなおにつきあって、相手の本当の姿をひきだすのがすばらしくうまい。その時相手の動物は決して種の代表でもなければ、生物学発展のための道具でもなく、不思議な友だちのようになる。彼は動物をさげすみもしないし、あわれみもしない。かわいがるという押付けがましい態度もとらない、ただ相手の性格と自分の性格が許すような形でつきあう…」と記していました。

今、再び、私は保育の現場にあって、子どもたちと小動物の出会いに心打たれる日々を送っています。そして、かつてH幼稚園で出会ったザリガニやハムスターのことを思い出します。

私は子どもと共に、一匹一匹の動物とすなおにつき合いたいと思っています。自分本意にいろいろ理屈をつけて動物に向うのではなく、押付けがましくつき合うのではなく、友達のように大切に向き合って行きたいと思っています。

（青山学院幼稚園）